

意識と意志

SAMPLE
Shoshi-Shinsui.com

SAMPLE
Shoshi-Shinsui.com



意識と意志

西田幾多郎論文選

書肆心水

shii-Shinsui.com

SAMPLE
Shoshi-Shinsui.com

意識と意志

目次

SAMPLE
Shoshi-Shinsui.com

I 意識の問題

意識とは何を意味するか

感 覚

感 情

象徴の真意義

意 志

経験内容の種々なる連続

意志実現の場所

意志の内容

関係に就いて

意識の明暗に就いて

個体概念

ライプニッツの本体論的証明

II

感情の内容と意志の内容	173
作用の意識	204
意志と推論式	221
取残されたる意識の問題	228
直観と意志	237
自己自身を見るものの於てある場所と意識の場所	244
場所の自己限定としての意識作用	261
自由意志	282
(参考資料) 西田幾多郎著書目次一覧	309

SAMPLE
Shoshi-Shinsui.com

意識と意志

西田幾多郎論文選

SAMPLE
Shoshi-Shinsui.com

凡例

- 一、底本には岩波書店版西田幾多郎全集を使用した。
- 一、本書では新漢字、新仮名遣いで表記し、踊り字（繰り返し記号）は「々」のみを使用した。
- 一、収録各篇の配列は発表時期の順とした。
- 一、読み仮名ルビは全て本書刊行所が便宜的に補ったものである。「」で括った訳も本書刊行所が便宜的に補ったものである。訳は全集の注解に掲載されている場合はそれに倣った。

SAMPLE
Shoshi-Shinsui.com

I

意識
の
問
題

SAMPLE
Shoshi-Shinsui.com

SAMPLE
Shoshi-Shinsui.com

序

此書は余が嘗て著せる「自覚に於ける直観と反省」の終に於て達した立場から、主として意識の問題を論じて見たものである。余はかかる問題を攻究することによって、精神科学の基礎概念を明にしたいと思つたのであるが、尚徒らに問題を提出したというに過ぎない。

此書に於て、余が実験心理学に反対するものの様に思われるならば、それは誤解である。実験心理学が厳密に其立場を守るかぎり、余は此学の価値と功績とを認めるに躊躇するものではない。唯、此学が何処まで、精神科学の基礎として、すべての深い問題を解決し得るかは疑なきを得ない。加之、余は心理学は他の科学にもまして、哲学的反省を要するではないかと思うのである。

此書固、一つの習作に過ぎない。思想の未熟なるは云うまでもなく、或は前後一致しない様な所もあるであらう。偏に読者の同情ある理解を冀うのである。

大正九年一月

西田幾多郎

改版の序

カントが一度、形而上学を排斥し、事実の問題と価値の問題とを峻別して以来、一途に形而上学は過去の学問と思われ、体験の内省は、なべて心理主義に陥るの恐あると思われ、傾がないでもない。併し形而上学が爾く容易に葬り去ることができるや否やは疑問であり、又所謂新カント学派の人々があまりに論理に偏して、深い体験の内省を欠いて居たということは、殊更に問題を局限し、明にすべきものをも明にしなかったという弊がなかったかと思う。

東都大震災の後再刻の日

著者

SAMPLE
Shoshi-Shinshui.com

意識とは何を意味するか

我々はおのずから或物とか或事柄とかが自分に意識せられて居るとか居ったとかいうことを知って居る、従って此等のものと意識せられなかったものとを区別する。物が意識せられるとは如何なることを意味するのであるか。

物が我々に意識せられると否とは物自身に何等の変化もないと考えることができる。例えば数理とか物理現象とかいうものが我々に意識せられると否とは数理とか物理現象とかいうものに何等の關係もない。舊に此等の対象が意識作用と關係のないのみならず、意識現象の性質として考えられて居る赤とか青とかいうものも表象自体として意識作用を超越して居ると考えることができる。赤とか青とかいうものも意識せられることによってその性質を变じない、意識作用は表象自体に何物をも附加しないのである。

普通には色とか音とかいうものは精神現象の性質であると考えられて居る。エーテルの波動が眼底を刺戟して色と感じ、空気の振動が内耳に入って音と感ぜられる。色とか音とかいうものは外界刺戟が感官に触れて生理的刺戟を起し、此刺戟が脳中枢に伝わり、之に伴うて起る精神現象の性質と考えられる。精神と物体との間に因果的關係を考え、甲の物体の作用によって乙の物体に変化を生ずる如く、種々の感覺的性質は外界刺戟の作用によって起されたる意識現象の性質に過ぎぬと考えられるのである。赤とか青とかいうのは意識現象其者の性質であって、此等の性質を離れて意識現象なるものはない。赤の感覺とか青の感覺とかいう外に意識というものがあ

後に物力を考えると同じく、抽象的思惟の作用に過ぎないと考えることもできる。

青の感覚、赤の感覚、空間知覚、時間知覚等其他種々なる個々の意識現象を離れて意識というものはない。恰も電磁気の現象を離れて電磁気がないと一般であると考ええる人もある。併し此等の語は厳密に考えて見なければならぬ。我々は赤とか青とかいうものを感ずることもできれば、之を記憶表象として想起することもできる、又之を思惟対象として考えることもできるのである。之を以て見ると赤とか青とかいうのが直に赤の感覚、青の感覚ではない。赤の感覚には赤の外に何物かが加わらねばならぬ、即ち意識の対象と作用とは区別せねばならぬ。赤の感覚作用とか知覚作用とかいうものが赤ではない、寧ろ知覚せられるもの、想起せられるものが赤いのである。赤というものは意識の対象の性質であって、意識作用の性質ではないと云つてよい。無論、斯く意識の対象と作用とを分つて考えるのは思惟の所作に過ぎない、具体的意識現象には此の如き区別はないとも云い得るであらう。意識現象は物理現象と同じく具体的出来事と考えられる。併し今赤の経験が青の経験に変じたとする、我々は之を赤の感覚が青の感覚に変じたと解することもできれば、外界に於て赤の光が青の光に変じたと解することもできる。之を感覚の変化と考えれば、すべてが直接経験の事実として誤なきものと思ひ、之を外界に於ける物体現象の変化として説明するのは推論であつて、時に誤ることがあると考える。併し物理現象とは所謂客観的立場から我々の経験を統一したものと云え、我々の感覚的経験を離れて物理現象があるのではない、物理現象とは感覚的経験の変化に対する一種の解釈である。翻つて所謂心理現象なるものを考へて見て、それが果して心理学者の考へる如く直接経験の事実その儘何等の思惟の加工をも混じないと云い得るであらうか。赤の感覚が青の感覚に変じた場合、我々は之を意識内の現象として之に就て十全なる知識を有する直接経験の事実と考えて居るが、外に對して立てられた内は所謂外と同じである、所謂我は物と同じく外界的である。固より現今の心理学者は我という如き實在を考へないであらう、一々の精神現象を其時其時の出来事と考へて居る。併し若し此考を徹底するならば、精神現象の再起ということとは全然不可能とならねばならぬ。記憶とか意識統一とかいうことは如何にして説明することができ得るであらうか、赤の感覚が青の感覚に變つたという意識は如何にして可能な

るか。厳密なる意味にて一度限りの出来事は何等の實在性をも帯びることはできぬ、その間に何等の結合をも考へることはできぬ、心理学的法則を考へるのも無意義となるであろう。

赤の感覚が青の感覚に変じたという場合、之を単に一度限りの出来事の連続と見るならば、心理的實在とは如何なるものであろうか。出来事とは何物かの上に於ての出来事でなければならぬ、何物かはその基礎とならねばならぬ。現象の背後に所謂実体の如きものを考へる必要はないとしても、此等の現象が何等かの意味に於て独立し、それ自身の法則を有するならば、出来事の単なる連続以上のものでなければならぬ。物理学に於ても種々の現象を出来事と考へるのであるが、其背後に種々の力とかエネルギーとかを考へることに依つて物理的實在が成立するのである。苟も客觀的實在として我々の認識対象となるものは、自然科学的實在の如く現象間の不変的關係という如きものか、歴史的實在の如く種々の現象を個性的に統一する如きものかでなければならぬ。若し個々の要素を實在と考へるとしても、物理学者の所謂原子の如きものかヘルバルトの所謂 *Reizen* の如きものを考へねばならぬ。ヴァントに依れば現今の実験心理学は主意説であつて個々の精神現象を出来事と見做し、物理現象と同じく実験法を用いて之を研究すると云うが、それにしても現象と現象とを關係せしめるものがなければならぬ、此等の現象を統一する根本概念がなければならぬ。物理現象に於ては空間、時間、運動というものが此等の根本概念となるのである、空間的延長というものが物理現象の根本的性質となるのである。心理現象を考へるにも、何等かの意味に於て此の如き根本概念がなければならぬ。然らざれば心理現象の關係を考へることも不可能である、心理現象なるものを他と區別して考へることもできないであろう。

意識は誰かの意識である、或人に意識せられるということが意識現象の特徴と考へられる、これが意識現象の我々に直接と考へられる所以である。併しこの或人というものは何を意味するか。現今の心理学では、現象の背後に我々という如き實在を考へない、自己同一の意識は統覚作用に伴う一種の感情と考へられて居る。此感情が不変なるが故に自己も不変と考へられる、此感情が失われるれば二重人格の如き現象を呈するのである。右の如く考へるならば、我々というのは所謂意識現象の結合点であつて、或人に意識せられるということは或一点に結合せられ

ということとなる、意識現象が或人に意識せられるということは一つに統一せられて居るということとなる。併し此の如き統一という語の意味も厳密にしなければならぬ、意識現象は如何なる意味に於て統一であるか、意識統一とは何を意味するか。意識現象の統一とは物体の原子の如き実質的一者であるとは今日何人も考えないであらう、併し単に意識現象が相互に関係するということに過ぎぬならば、物理現象も互に相関係するのである、一つの現象が他の現象に影響を及ぼす所に物理的法則が成立するのである。意識統一とは単なる相互作用以上のものでなければならぬ。精神現象に於ては関係其者が実在的であるのである、精神現象は多にして一、一にして多であると言われるのは之によるのである。

物体現象は空間、時間の上に於て相働くのであるが、空間、時間は物体現象にあらざることはないまでもない。嘗て考えられた如く物質はエーテルという連続体の渦動であると考えれば、物体現象の背後に於ても一つの連続体が存在すると考えることもできるであらう。併し此の如き統一は実質的一者である、一原子の実在性と同様である。精神現象に於ては、これに反し、要素の実在性と共に、全体の存在性が保たれ得ると考えられる。例えばジェームスの云った様に、我々が或一つの文章を順序的に意識する時、その一語一語の意識に於て全体の意味が含まれて居ると考えることができる。又ヴントなども意識現象に於ては新なる総合的意識現象が成立するも要素的意識現象は尚その実在性を維持すると考えて居る。氏が心理的因果律を自然科学的因果律と區別して、創造的综合となすのは之に由るのである。如何にして精神現象に於ては総合的全体が構成的要素に対して実在性を維持することが出来るか。綜合者が被綜合的要素と同列の実在としては自己の実在性を維持すると共に、他に対して総合的位置を取ると考えることはできぬ。例えば前に云ったジェームスの考にしても、文章自体 *sentences* ともいふべき意味の意識は一語一語の意識に比して一層高次的と考えられねばならぬ。ジェームスは根本的経験論の立場からは *from* とか *from* とかいう如き関係語によつて表わさるる意識も経験であると云うが、単に意識せらるると云えば同じ様に思われるかも知らぬが、その意識内容の異なる如く、意識せらるるということの意味が異なるからねばならぬ、プレントナーノ学派の所謂作用に於て異なるからねばならぬ。ヴントの考にしても氏の所謂精神的要

素と表象と、又は表象と聯想や統覚などとはその次位を異にするものでなければならぬ。右の如く考え得るならば、意識現象に於て全体が部分に対して有する實在性は高次的のものであるということが出来る、即ち意識に於ては一層高次的なるものが實在となるということが出来るのである。無論多くの心理学者は此意識を単に強度に於て弱きものと考えるであろう、自覺せられぬ一種の意識と考えるであろう。併し単に強度に於て弱いということとは他に対して総合的地位を取るという理由にはならぬ、単に弱き感覺と見るの外はなからう。無意識的意識というのは単に強度の弱いものではなくして性質的に異なつた意識でなければならぬ。一般の心理学者に承認せられない説ではあるが、余は所謂ヴルツブルク学派の説の如く、意味の意識は決して不明瞭なる意識ではないと思う。無論一般の心理学に於ても、無意識的意識がそれだけとして総合的地位を取るといふのではなく、無数なる過去の経験内容を代表するものと考えるのであるが、如何にして斯く一つの要素が無数なる他の経験内容を代表することが出来るか。若し之を聯想の法則に依るといふならば、表象と表象とを結合するミーディヤムとなるものは何であるか。普通に考えられる如く之を脳細胞の作用に帰するならば、精神現象に於ては自然現象と異なつた統一が實在であると云われなくなる。之を表象其者の力に帰するならば、ヘルバルトの表象力学説 *Psychologismechanismus* の如きものとならねばならぬ。併しヘルバルトの考えた様に表象がそれ自身の力を有し互に相制 *hemmen* すると考えるならば、此の如き表象力というのは如何なる意味に於て、物力よりも一層我々に直接的と考え得るであろうか。物力と表象力とは力の性質を異にするとしても、共に我々の経験内容を対象界に投射して相互の關係を統一するため、その背後に考えられた一種のミーディヤムに過ぎないではなからうか。対象界に投射して考えられた所謂無意識はその實在性に於ては物力と同一である。総て量別的關係は性質的なものに対して外界的でなければならぬ、量別的關係によつて内界経験を説明しようとするのは既に外界の實在と認めることである。ヘルバルトの表象力学はこの種に属するものである。之に反し多くの心理学者の考える様に意識の強度というも一種の性質と考えるならば、それは内界経験に属して性質的となり、単に記述さるべき事実となると共に、事実を説明すべき原理となることはできぬ。是に於て我々はディレンマの上に立つ、内界経験の事実として

現れるものは統一の原理となることはできず、統一の原理となるものは内界経験の事実として現れることのできない實在でなければならぬ。此（この）ディレンマを脱し得るには、意識現象に於て高次的なるものが實在となると考えねばならぬ、統一作用其者（その）が意識の事実となると考えねばならぬ。精神現象に於ては統一作用が却つて直接である、是（これ）その自然現象と異なる所である。

右の如く考えて見るならば、或人（ある）に意識せらるるとは何を意味するのであろうか。所謂自己同一の感情という如きものは統一作用の符牒であつて、統一作用其者（その）ではない。意識せられた自己同一の感情が統一するのではなくして、此感情（この）の対象たる自己が統一するのである、此感情はその結果にすぎない。併し（しか）意識現象に於ては統一作用の外に統一者があるのではない、働きの外に働くものがあるのではない、働くものなき働きである、働きの働き自身を維持するのである。此（この）如き現象は如何にして可能なるか。此（この）如き作用其者（その）と見らるべき現象はその変化の理由を内に有（も）つて居るものでなければならぬ。一つの状態より他の状態へ内面的必然によつて移行行くものでなければならぬ。若し（も）その推移に何等かの間隙があるとすれば我々は此現象（この）を統一するに、外界的結合者の力をからねばならぬ、即ち働きの外に働くものの仮定が必要となつて来るのである。右の如く作用が作用自身を維持すると考えられる實在に於てはその全体の内容が個々の部分に比して、一層實在的と考えられねばならぬ。精神現象は此（この）如き内面的發展なるが故に、其綜合的全体は要素に対して一層高次的なる實在と考えられるのである、否要素よりも全体が實在的と考えられるのである。意識現象は誰かに意識せられて居る、誰かの意識でなければならぬというのは之（これ）に由るのである。ヴントが意識現象を出来事と見做し、意志を以て精神現象の根本的形式と考えるのも、同一の理由によると考えることができる。物体現象に於ては、その統一者は現象の背後に即ち経験の外にあると考えられる、これその間接経験と考えられる所以である。之（これ）に反し、精神現象に於ては、統一作用其者（その）が経験に現われるのである、思维の対象自身が経験の内に働くのである、精神現象に於て対象が内在的と考えられるのは之（これ）によるのである。精神現象は恐らく価値関係というものを離れて考えることはできぬ、精神現象に於ては規範が直に動因となる、精神現象を単に自然科学的法則によつて考えるのはその本質を否定する

ものである。嘗に永久真理の法則が直に充足理由となるのみならず、作用が作用自身を維持し、外に本体論的統一を要しないのである。例えば数学的証明の過程に於て一つの命題より他の命題に移る時、他の力の助をかる必要はない、それ自身に十分なる内面的必然によって推移するのである。勿論可能的なるものが実在的となるには何物かが加わらねばなるまい、実在的作用の説明には矛盾律の外に充足理由の原理 *le Principe de la raison suffisante* を必要とすると云い得るであろう。併し兎に角精神現象に於ては可能的なるものの中に直に充足理由をふくむと考えられねばならぬ。意識現象は或人に意識せられて居ねばならぬという「或人」とは此の如き作用の統一者でなければならぬ。我々の真の自己とは理想と現実との結合点である、ライプニッツのいう如き永久真理と充足原理との結合点である。ライプニッツのモナッドは此の如き意味に於て真に精神現象の根本的方式である。我々が意識現象を内面的とか直接とか考えるのも此性質によるのである、作用其者の中に作用の原因を寓するところが此現象をして内面的とか直接とか考えしむるのである。此の如き内面的推移の少しにても断絶せる所には、意識は両断して二つの意識と考えられるのである。

精神現象は内面的必然によって推移する作用の現象であるというには、多くの反対を考えることができるであろう。思惟作用に於ては、或は右の如く考え得るかも知れぬが、我々の精神現象の推移は必ずしも内面的必然によつてのみ推移するものとは考えられない。我々の精神現象の推移には多くの偶然性があると考えることができる、而して此等の現象が或人に意識せらるるということによつて統一せられて居るのである。我々が或物を見次に之と全く関係のない他の事を考えた場合にも、此等の出来事は「私の意識」によつて統一せられて居るのである。斯く云い得るならば、意識とは意識内容に附加せらるる何等かの性質であるとも考えられる。例えば光に照らさるることによつて種々の色が明となる如く、意識は種々の内容を照らす光の如きものとも考えられるのである。併し右の如き意味に於て意識せられたものと然らざるものとを区別するのは如何なる性質によるのであるうか。意識は往々説明のできない単なる感覚の如きものと考えられるかも知れぬが、我々は感覚作用を意識することもできれば思惟作用を意識することもできる、否感覚も意識であれば思惟も意識である。此等の作用がすべ

て意識であるというならば意識というのは此等の現象に共通なる性質でなければならぬ。而して此等の作用に共通なる性質はそれぞれの立場に於ての内面的必然の推移ということである。然るに之にも拘わらず此等の作用の背後に於ける偶然的統一が一つの意識として考えられるのは意志の作用によるのである。意志に於ては互に偶然的なる内容が内面的必然を以て結合せられるのである。意志は偶然的なるものの必然的統一である。此場合にも意識は内面的必然の推移であるという考を改める必要はない。我々が互に偶然的と思われる作用を統一して「私の意識」と考えるのは意志作用の内面的統一に依るのである。一より他に移る時、偶然と考えられるのは立場が異なるが故である。如何にして偶然的なるものが必然的に結合し得るか、偶然的なるものの必然的統一とは矛盾ではなからうかという疑問も起るであろうが、意志的統一の必然は道德的当為の必然である。道德的規範が充足理由の原理として働く所に意識現象の根本的事実がある、他の意識現象も此姿を映したものと考えることができる。此事実が我々には意志自由の確信として現れて来るのである。斯く可能より直に現実に移る自由の作用を除く去すれば感覚は物質的性質となり、思惟は単に永久の真理となるのである。

意識を右の如く解するならば、意識せられなかったものが或人に意識せられるとは如何なることを意味するかを考えて見よう。現今の純論理派の主張に従えば、意味とか存在とかいうものは全然我々の主観的作用を超越して、或主観者が之を意識すると否とは意味自身、存在自身に何等の關係もないと考えねばならぬ。併し一方から考えて見れば、かく客観的といわれるものも我々の思惟の対象である。無論此等の対象と思惟の作用とは別物であると云い得るでもあろうが、此等の対象との關係を離れて思惟作用というものを考えることができるであろうか。前に云った如く要素的感覚の単なる結合は思惟作用となることはできぬ、時間、空間を超越した意味が統一作用として働くと考えることに由つてのみ、思惟作用なるものを理解することができるのである。純客観的なる意味とか存在とかいうものと思惟作用とは全然離して考えることはできぬ。意識せられなかった純客観的の意味とか実在とかいうものが意識せられるということは、此等のものが思惟作用として我々の意識内に働くということである。主観的には我々が思惟作用に移り行くことである。感覚的経験によつて外界を知ると考えるときその

実我々は感覚の作用から思惟の作用に移り行くのである。現今の新カント学派の考える様に、感覚とか事実とかということがすでに思惟の所作と考えねばならぬならば、我々の意識の根柢には感覚以上の或物あるものを認めねばならぬ。心理学者が具体的なる意識現象は単なる知識ではなくして、知情意の三方面を具すると云うのも之これによるのである。斯くして我等の意識の眞の起源は所謂自然科学的因果関係よりも一層深き所に求めねばならぬ。意識の起源には所謂物体の世界があるのではなく、意味の世界、可能の世界があるのである。意識現象は意味の因果律によつて起るのである、若し此かくの如き因果の形式を意志的因果律と云い得るならば、意識は意志的因果律によつて起ると云い得るでもあろう。意識は感覚の形に於て始まるのではなく、意志の形に於て始まるのである。意識の起源には可能より現実への直接の推移がなければならぬ。ライプニッツの神に於ての様に、可能的なるものが直に実在的でなければならぬ。充足理由の原理は之これを現わすものと考えられることもできる。勿論此かくの如き考かんがえを認むるには種々の困難もあるであらうが、我々が赤の感覚を意識するには色の世界がなければならぬ。色の理念が働かねばならぬ。色の感覚の背後にはエーテルの波動の世界があるのでなく、色の本質の世界があるのである。所謂自然科学的存在の世界は意識の世界に比して第二次的である。我々が存在の世界を知ることと意味の世界を知ることとはその意義を異にして居なければならぬ。後者は意識の根柢となり、前者は却つて其上に建てられるのである。意識の眞の起源を右の如く考えるならば、意識せられなかったものが意識せられるとは何を意味するか、意識作用と意識対象との間に如何なる関係があるか。現今の純論理派の言の如くならば、対象と作用との結び付き様はないのであるが、此かくの如き分析の前に綜合がなければならぬ。意識の直接の背後は無限なる可能の世界である、ライプニッツの極微知覚 *petites perceptions* も此かくの如き可能の世界を意味して居らねばならぬ。可能と実在とを分つのは意識せられた世界に於てである、意識界に於ては可能は直に実在でなければならぬ。我々の意識は意志として無限なる可能の世界に連なつて居る、モナッドが極微知覚に於て宇宙を知るといふ如くに、我々は意志に於てすべての可能界を知ると考えることもできるのである。意志は意識の具体的基礎である、意識は意志の基礎に於てのみ可能である、意志は意識の極限点である。意志に於て主客合一し、意識は眞実

在たる物自体に接触するのである。例えば我々が一直線を意識するとせよ、極限点とは我々の分析によって達することのできない超感覺的な思惟対象である、而も我々が一直線とか運動とかいうものを意識するのである。此場合、一々の点が極限点として意識せられねばならぬ、一々の点に於て理想と現実とが相接触して居らねばならぬ、一々の点の意識は意志でなければならぬ。勿論純論理派の考の様に連続という如きものは純なる思惟対象としてそれ自身に独立し、思惟作用として意識せられると否とは対象自身に何等の關係もないと考えることもできる。永久真理の中には充足原理を含んで居らぬ、永久の真理が實在的となるにはライブニッツが“De rerum originatione radicali”『事物の根本的起源について』に於て云つて居る様に inclining reason「傾かせる理由」が加つて来なければならぬ（rationes non necessitanti, sed inclinant.「理由は強いるのではなく、傾かせるのである」Gerh. VII. 302.）。永久の真理と永久の真理との結合は余の考では知識のアプリオリとアプリオリとの結合であつて、そこに限定があり、實在がある、實在は此意味に於ての compossible「共可能的」である。純論理派の如き考え方は、此の如き結合にはライブニッツの充足理由の原理の如きものが外から加つて来なければならぬと考えるのであるが、ライブニッツが“Mondologie. 44.”に於て云つて居る様に、永久の真理の中に於て何等かの實在性があるならば或存在（quelque chose d'Existant et d'Actuel「何か現に存在しているもの、現実的なもの」）に於てその基礎を有せねばならぬ。固より之を自然科学的存在の意味に解するならば大なる誤謬に陥るのであるが、或一つの真理が真理として己自身を維持するには、或一種の力を有たねばならぬ、而して斯く一つの真理が他に対して己自身を維持するには、即ち一種の實在性を有するというには之を他と關係せしめるものがなければならぬ。我々は真理の力を認めると共に真理の体系を維持する一種の主体 Subjectum を認めねばならぬ。或一つの命題が真理として立せられるには、すべての命題の主語として如何なる意味に於ても述語とならない主体がなければならぬ。此意味に於て真理はそれ自身に於て立つ生きた一つの個体である。すべての命題の真の主語を“Reality”と考えねばならぬというのものによるのである（Bosanquet）。ライブニッツにては永久真理の原理と、充足理由の原理との内面的關係が明でないが、種々なる真理のアプリオリを結合するものは意志のアプリオリである、換言すれば種々なる作用を結合するものは意

志の作用である。意志のアプリオリの上に於て他のアプリオリは成立つ、永久真理に実在性を与うるものは充足理由の原理である。compossible は単に possible の無限なる和ではなくして、可能をして可能たらしめる基礎でなければならぬ。ライブニッツがスピノーザに逢った時、「最も完全なるは存在す」Quod ens perfectissimum existit と論じて無限なる性質は一主体に結合することができ、何となれば二つのものが incompatible 「両立不可能」というには二つのものを分けて見なければならぬ、然るに此の如き性質は分つことができぬと云ったというが、此の如き主体は絶対無限の意志でなければならぬ。

以上論じた如く意識作用とは意味から意味への内面的推移である、意味の内面的推移というのは意味其者が一つの力として他の意味を惹き起すのである。意味はすべて実現せらるべき傾向を有つて居る、即ち意識せらるべき傾向を有つて居る、之なければ意味は意味自身を保つことはできない。此の如き傾向が我々の所謂精神作用といわれるものである。併し意味が他の意味を惹き起すということ即ち意味の内面的推移ということは無限なる意味が一つの主体に統一されて居ることを意味せねばならぬ。限定された或一つの意味から他の意味が出て来ることはできない、或一つの意味が限定されるにはその背後に他の限定の可能を含んで居る、即ち一層具体的なる基礎に於て限定せられるのである、*da + jyn da* (存在非存在) の上に於て限定せられるのである。此の如き可能界の主体の上に立つということが意味自身が力を有することであつて、内面的推移というのは此の如き基礎に於て含蓄的であつたものが顕現的となるのである。意味は此の如くして内面的に推移するのである、これが意味の働く方式である。意識現象に於ては統一作用が実在的であるというのは之によるのである。意識せられたものと意識せられないものとの区別は actual と possible との区別となる、而して現実 is compossible である。我々は極微知覚に於てはすべてを意識するということもできる。我々が一つの直線を意識した時、極微知覚に於て無限なる分析の可能を含んで居ると考えることができる。我々の現実の自我は何時でも可能界の主体たる先験的自我に連なつて居るのである。所謂「意識の闕」の如き考によつて無意識から離された意識は考えられた意識である。具体的意識はライブニッツが現在が過去を負い未来を孕むという様に (en conséquence de ces petites perceptions le présent

est gros de l'avenir et chargé du passé, que tout est conspissant.) 「そうした微小表象の結果として、現在は未来を争みかつ過去を担っている。すべては相呼応している。」無意識の部分を含んで居なければならぬ。意識の中に無意識を含むのが内面的推移である、我々が意識と無意識とを区別するのは両者統一の立場に依るのである。併し possible と compossible とは単なる程度の差ではない、後者は前者の単なる総和ではない、之には inclining reason が加わらねばならぬ。単に思惟対象たる意味と作用として働きつつある意味とは区別しなければならぬ、現に働きつつある意味と然らざるものとを区別しなければならぬ。意識現象に於て直覚が根本的と考えられるのは之に由るのである。多くの心理学者が感覺を意識の根本作用と考えるのも此故である。思惟にてもその全体が先ず直覚的に現れ来るのである。此の如き直覚は内面的推移の根柢たる具体的全体即ち *ôv + m'ôv* を表わすものである、意味が意志の支配の下に来ることを示すものである、永久の真理と充足理由の原理との結合を示すものである。意志作用の原理たる充足理由の原理が意識の根本的原理でなければならぬ、之によって有限の中に無限を含み、意識の中に無意識を蔵し、作用から作用に移ることができるのである。

余が今一種の色を経験する、否そこに一種の色の経験がある、之を「私の経験」であると考える時、此経験は主観的と考えられざるを得ない。併しここに一種の色の経験が現存するということは単に主観の力によるのではない、我々は又是に於て外界に光線なるものを想像せざるを得ない。加之、色を単に主観的と見るも其性質は多くの主観に共通と考えられねばならぬ、即ちフッサールの本質 Wesen という如きものが考えられねばならない。色の経験は主観的というも、色の経験の存在及変化に対して所謂自己は何等の力を有するのではない。経験それ自身が一種の客観性を有して居る、物理的現象というも此変化を離れてない。我々は此等の経験の変化を時間、空間、因果の範疇に当嵌めて自然界を構成するのである。真に与えられたる直接の経験其者は意味其者の内面的発展である、客観の中に主観を含み主観の中に客観を含む Tathandlung 「事行」である。此意味に於て精神現象は物理現象に比して一層直接であり具体的であると云える。物理界というのにも主観を離れたものではなく、カントの所謂先験的自我の統一によって成る一つの意識対象界と考えることもできる。所謂自然界というのは一般的

ではあるが抽象的な認識主観の統一によって成立せるものであって、意識現象というのは此立場から翻って具體的な直接の経験を見たものである。或一つのアプリオリの上に立つ対象界から、翻ってアプリオリを対象とする意志の世界を見たものである、或一種の価値の上に立つ客観界から翻って価値即実在の世界、意味即事実の世界を見たものである。此処には目的論的原因と道德的必然とが支配するのである。此の如き方向を逐うて自然界から具體的体験の世界に至る順序は、物力の世界から生命の世界に至り、生命の世界から意識の世界に至り、意識の世界から歴史の世界に至り、更に時空を超越して絶対意志の対象界に入るのである。心理学者の所謂意識界とは絶対意志の対象界と自然科学的世界との接点である。

純粹直観の世界は全然客観的でもなければ全然主観的でもない、即ち全然物世界でもなければ全然精神世界でもない、それ自身に動的な具體的経験はおのづから主観、客観の両面を備えて居る。我々は経験内容に就て区別することができただけ、それだけ種々の対象界を有すると共に、種々の精神作用を有するのである。思维内容と感覚内容とを分つことに由つて、一方に命題自体と表象自体との対象界ができるとともに、一方に思维とか感覚とかいう作用が考えられねばならぬ。作用というのは種々なる経験内容をその結合点から見たものである。併し斯く種々のアプリオリの上に立つ経験を作用として、此等の作用を結合する一層根本的な経験も亦一つの具體的経験として主観客観の両方面を有つのであるから、その対象界はおのづから二重となり、直接には意識界即ち人格の歴史の世界となり間接には自然界となり、而して自由の意志がその主観的作用となるのである。何となれば意識界は既に作用の結合として自然界に対しては主観的であるが、更に絶対自由の意志の立場から見れば客観的である、絶対自由の意志は人格と人格との結合点である。此の如き絶対自由の意志の対象界が我々の所謂直接の実在界である。ライプニッツのモナッドの世界とは此の如きものと見得るであらう。意志の立場から見て、所謂作用の結合に無限の仕方がある、無限のモナッドがあると考へらるるは之によるのである。此の如き作用の結合の仕方の無限なるが如く、そこに無限のモナッドがなければならぬ。ライプニッツはモナッドは皆同一の世界であるが、其見方 (différents points de vue) に於て互に異なるという (Monadologie: 『メタモロジー』 57)、例え

ば一つの円の射影が無限なる円錐曲線の変化を起す如きものであると云つて居る (Théodicée. 『弁神論』 357)。作用の種類は同じいとしても之を結合する仕方に無限あると考えることができる、即ち意志は自由である。無限なる意志の type は無限なるモナッドの見方として、之によつて無限のモナッド、無限の実在界が成立つのである。

(ライプニッツのモナッドは余の所謂意志の対象界の実在である、余はかかる考から、タルドの “Monadologie et Sociologie” 中にある *toute chose est une société, tout phénomène est un fait social* 「すべての事物は一つの社会であり、すべての現象は一つの社会的事実である」 という考に興味を有するのである)。我々が或物を意志するというのは一つのアプリオリの上に於てするのである、即ち一つの作用に於てするのであるが、作用の束たる一人格の意志としては、他の無限なる作用との関係に於て立つ、即ち極微知覚として他の無限の作用と関係するのである。

以上論じた如き訳であるから、物体現象の特徴を延長とすれば即ち所謂空間的であるとすれば、之に對して精神現象の特徴を意味即作用たる自足的発展と考えることができるのであろう。物体現象の空間的というに對して精神現象は單に時間的と云われるのであるが、時間というも、單に無意義の連続という如き形式はベルグソンの所謂同質的時 *le temps homogène* であつて、之を以て精神現象を物体現象から區別することはできぬ。真に具體的なる時間は自足的発展でなければならぬ。種々なる経験の変化及び相互の關係の物理的解釈は言うまでもなく、マイニングの対象論 *Gegenstandstheorie* の如きものも、單に對象間の客觀的關係と見られるであらう、意識現象は此等の経験内容の共立關係 *compossible relation* でなければならぬ。此意味に於て意識現象は實在的であり、心理学は實在の学である。而して此の如き共立關係を現すものは意識の統一 *unity of consciousness* である。意識現象は意識の統一に於て成立つ、少くとも統一の可能的傾向を有して居らねばならぬ。或経験が意識現象と見做されるのは此傾向を有することに依るのである。純なる一つのアプリオリの上に立つものは單なる對象界である、他の意味との結合に於て意識現象となるのである。(心理学者が意識は誰かの意識でなければならぬとか、意識に於ては對象が内在的であるとかいうのは、之を意味するのである)。心理的法則というのは右の如き約束の下に於ける意味の關係的法則でなければならぬ。此の如き意識統一も身体という物体的条件の下に立つというのが

普通の考え方であるが、我々は却って意識の方が一層根本的な実在と考えねばならぬのである。無論右の如き統一点は恰も極限点の如く到達することのできない点であろうが、之なくして意識の成立はできない、意識成立の sine qua non (必須条件) である。向に云った如く意識の根本的形式が意志と考えられ又直覚的と考えられるのは之に由るのである。

余は純粹心理学ともいふべきものは右に述べた如き立場の上に立つものでなければならぬと思う。此点に於て心理学は自然科学とその立場を異にして居ると云い得る。無論此の如きことは心理学者は疾く之を知ると云うでもあろうが、今日の心理学はその説明に於て十分その立場を明にして居らぬではなからうか。例えば聯想と統覚との區別を統一的表象の明瞭と不明瞭とによつて考える如きも、嚴密に考えれば精神現象を外から見たものであつて、真に意識現象としての内面的區別が考えられて居らぬと思う。精神作用の區別の如き却つてブレンターノやマイノングなどの考え方が純心理的といふべきではなからうか。情緒の説明の如きも所謂實驗的研究といわれるものよりも、スピノーザのエチカに於ける情緒の説明の如きものが却つて真に意識としての情緒の本質に觸れて居るのではなからうか。徒らに經驗といい、事實というも、すべての實在の經驗とか事實とかということが同一意義に於て論じ得るや否やは深く考えて見なければならぬ。併し余は決して現今の實驗心理学の価値に就て異議を挟むのではない、唯、現今の實驗心理学を以て唯一の心理学となすことに対して尚多くの疑を存し、且つ今日の心理学に於ける立場の混淆に就て嚴密なる批評を要すると思うのである。